

令和7年度第1回倉敷市立自然史博物館協議会 議事録（要旨）

開催日時）令和7年7月16日（水）13時30分～15時30分

開催場所）倉敷市立自然史博物館地階講義室

報告事項）令和6年度事業報告
令和7年度事業計画

出席委員）碓京子委員、石垣忍委員（会長）、片岡博行委員、菊池勲委員、西山圭子委員、廣畑栄三委員、吉岡勉委員（副会長）（50音順）

欠席委員）末宗安之委員、中西公仁委員、山野ひとみ委員

事務局）仁科康教育長、永野裕二生涯学習部長、杉本紀明館長、三谷潤二郎主幹、奥島雄一主幹、武智泰史主幹、中西伸明主幹、萩原知博主任、鐵慎太郎学芸員、笠谷幹朗学芸員、江田伸司学芸員

傍聴者）1名

報道関係者）0名

議事録（要旨）

1 開会

事務局

開会にあたり倉敷市教育委員会教育長からごあいさつ申し上げます。

2 開会あいさつ

事務局（教育長）

倉敷市立自然史博物館協議会の開会にあたり、ひとことごあいさつを申し上げます。委員の皆さま方には生涯学習の推進にあたりましてご理解ご協力いただき、ありがとうございます。

令和4年3月に策定されました倉敷市公共施設個別計画で、自然史博物館はライフパーク倉敷に移転し、ライフパーク倉敷と機能を複合化した形で整備を検討する方針になっており、この方針を受け、令和6年12月に新自然史博物館・ライフパーク倉敷整備基本計画を策定しております。この基本計画では、新自然史博物館は、知る・学ぶ・楽しむというこの3つの要素のバランスの取れた博物館、そして、倉敷らしさを感じることができる、という方向を目指し、現在、準備を進めており、整備事業を実施するための事業者募集を開始したところでございますが、今後、より具体的な設計、あるいは整備へと進める過程におきましても、本協議会の皆さま方から、引き続き、ご助力をいただけたら大変ありがたく思っております。

本日の協議会は倉敷市立自然史博物館条例に基づいて、開催され、博物館の運営等に関し、皆さま方のご意見を伺う機会とさせて頂いております。この後、自然史博物館の現状につきまして説明をさせて頂き、委員の皆さま方には、いろんな角度から、またご専門の方々からはいろんな角度から、忌憚のないご意見をいただきまして、今後のこの博物館の運営に活かしていきたいと考えております。

3 委員並びに事務局職員自己紹介

本日は10名のうち7名の方にご出席をいただいております、過半数に達しており、倉敷市立自然史博物館条例第14条第6号の規定により、会合は成立している。

4 報告事項・協議

会長

令和6年度事業報告・令和7年度事業計画について事務局から説明をお願いする。質問やご意見はこの説明が全部終わってから、まとめてお願いする。

事務局

・令和6年度事業報告

「集めて未来につなげる」では収蔵資料の状況で、収蔵標本点数は令和6年度末で1,104,495点で、受け入れ方法は93.7%が外部からの寄贈による受け入れである。令和6年度の受入点数は、4分野（地学・植物・昆虫・動物）で計7,869点で、登録点数は計16,233点で、受入より登録が多いのは前年度以前に受け入れたものを整理していることによる。令和

6年度末で登録済点数は564,023点である（地学：12,833点、植物：247,578点、昆虫：245,810点、動物：47,802点）。令和6年度の受入は植物分野が6,553点で多く、それは岡山市の片山久氏のヤナギのコレクション約5,000点の一括寄贈による。なお、植物・昆虫分野は中四国の博物館でトップの収蔵量である。一方、登録済文献資料は64,344点である。令和6年度の収蔵資料の利用実績は4分野合わせて400件近い利用実績があり、昆虫の利用が多い。令和6年度の収蔵資料の活用著作は33件あり、「日本のヒメハナカミキリ」図鑑は当館の収蔵しているカミキリムシ標本にもとづいて出版された。

「教養文化の向上を目指す」では、施設の全体の利用者数は令和6年度が42,648人で、そのうち入場者数は33,097人で、いずれも、令和5年度に比べて若干増加し、高校生以下の利用は令和5年度比では現状維持である。コロナ禍以前の水準にまで戻ってきた。特別展については令和6年度は「ぼくらのまちの7つのみどり」という植物分野の展示を開催した。その「7つのみどり」とは倉敷市内の7つの植生パターンであり、それについての展示を行った。この展示では7つの植生ごとの葉っぱを乾燥させた香りを楽しむ展示も行い、この工夫が人気を呼んだ。特別展以外は年間数回の特別企画展や特別陳列を行い、令和6年度は最近入手した標本をお披露目した「秘蔵お宝展第2弾」、チョウのコレクションを展示した「世界のチョウ」、子どもたちの作品を展示した「しぜんしくらしき賞作品展」、ボランティア団体のグループのご協力で行ったシカに特化した「シカだらけ」という展示を実施した。教育普及事業等は、野外の自然観察会と、標本づくり講座・自然の何でも相談会などの室内の講座等で、それぞれ20回以上実施した。教育委員会及び市のまちづくり指標の数値である「中学生以下の参加者数」は、年度目標を大きく超える1,016人の子どもたちの参加があった。また、11月の自然史博物館まつりでは令和6年度に2日間で3,141人の来場者があった。今回初めて外部のイベント業者の委託事業として、一部、その業者のイベントブース（忍者のショー、キャラクターショー）を開設し、また、自然史博物館・共催者の友の会のブースのほか、岡山理科大学恐竜学博物館・重井薬用植物園のブースなどもご出展いただいた。来場者は、令和5年度は3日間のイベント開催で2,096人だったのが、大幅に増やすことが出来たので、今後もこういった形式を研究しつつやっていきたい。

「人づくりを担う」では、各分野の専門の整理作業等のボランティアを中心に、いろんなボランティアが活動しており、令和6年度は総計（延べ人数）約700人の活動があった。学生を対象とした職場実習については、中学校の職場体験（チャレンジワーク）、大学生の博物館実習やインターンシップ（それぞれ数日間ずつ）を実施した。レファレンス対応の数では、市民やマスコミからの問い合わせなど、計850件対応した。

「連携して共に成長する」では、まちかど博物館では最長の貸出期間を1年から6か月まで短縮したところ、新規の申し込みが増え、令和6年度は新規に34件の申込・68台の貸出があった。出前講座等では年間19件の講師依頼があり、参加者計645人の実績があった。友の会には博物館の主催する自然観察会の大部分、共催のご協力をいただいている。

「魅力的な博物館をめざす」では、学芸員の館外の刊行物への寄稿で、令和6年度は山陽新聞の「さん太タイムズ」など、計79件あった。マスコミの報道件数は、博物館が取り上げられたものが記録できているものだけで55件あった。広報活動としては、現在、倉敷市はDX化で紙をできるだけ減らし、電子媒体の広報活動に移行しており、広報媒体も当館でも徐々に紙のチラ

シを減らし、電子配信に切り替えている。現在、広報の軸はホームページで一番詳細な情報を掲載し、それに加えメールマガジン、SNS（X（旧ツイッター）・インスタグラム）などを活用し、頻繁に多くの方に情報提供している。Xとインスタグラムは順調にフォロワーを伸ばし、令和6年度末では、Xで1,404人、インスタグラムで1,283人である。

なお、令和6年12月の新自然史博物館・ライフパーク倉敷整備基本計画に基づき、自然史博物館はライフパークに複合化、令和11年度に供用開始を目指し、事業を進めている。

・令和7年度の事業計画

展示では、企画展として年度当初から始まっている「倉敷市立自然史博物館秘蔵お宝展第3弾」を開催し、特別展は秋からの「暮らしを支えた岡山県の石たち」、そのほか、いくつかの特別陳列・企画展などを予定している。

自然観察会は内容は毎回違うが、例年並みに岡山県内の市町村を回る「おかやま自然探訪」、高梁川流域の自治体を回る「高梁川流域自然たんけん」、倉敷市みらい公園で行う「倉敷みらい公園で生き物さがし」といったシリーズ観察会があり、これらは総合分野の観察会として計画している。また、4分野それぞれの専門の自然観察会も実施している。

講座、イベント等については、標本の作り方や学芸員の研究紹介といったものを行い、友の会のグループのご協力で「自然素材を使った手作り教室」も日曜日や夏休みに何回か行っている。また、今までは夏休みの「自然の標本何でも相談会」という標本に特化した相談会を実施したが、夏休みに学校へ持って行く自由研究課題が親御さんも気になるので、そちらの方も対象にできるだけ幅広く自然史分野で対応すべく、今年度は「夏休み自然の何でも相談会」と称し、標本だけに限らず、身近な自然のことについて幅広く相談を受ける企画とした。

会長

ただ今の説明について、ご質問やご意見などがあるか。

毎回、非常に盛りだくさんのことを企画・実行されている。わたしも博物館に勤めていた身分として、これだけのことを学芸員とスタッフで協力してやるのは、大変なことだ。しかし、学芸員があまりに忙しすぎるというのもどうか。今後、博物館の将来に向けて、組織的に対処していくことなのかなと思う。

博物館は、外から見ているのと中から見ているのでは、立場の違いもあるし、実際に中でやっていることが外から見えにくいこともある。企画展や多く行われているイベントが目に入るが、その裏には様々な努力がある。標本の寄贈された数や登録された数を見ても相当なことが行われているし、みなさんが学術発表されている数を見ても大変な仕事の量だと思う。さらに、令和11年に新館に移るということも重なり、多忙だと推察する。これからそういう新しいことが入ってくる中で、博物館の活動を維持しながらやっていくことに、無理のないようにしてほしい。

作っていく人間がわくわくしながら面白いものを作るのは、良い博物館を作るために必須のこと。必要以上の頑張りが強要されるとどこかで限界がくるので、適切な支援が必要。正直な要望だがこうした点を考慮しながら進めてほしい。

委員

説明の中にレファレンス 850 件とあったが、地学・植物・昆虫・動物のカテゴリーにわけていくとなると、こういったレファレンスが多いか。それは外の方がどのようなことに興味を持っているのかということに通じる。

事務局

レファレンス 850 件の内訳は、昆虫が最も多く 300 件、動物が 193 件、植物が 186 件、地学が 140 件となっている。

会長

問い合わせはどういったところから来るのが多いか。

事務局

内訳のデータはないが、件数では、市内外の一般の市民の方が多い。内容としては、昆虫では「名前が知りたい」・「珍しいか」、昆虫や動物では「害があるのかどうか」・「害で困っている」、といったものが多い。

会長

中学校のお子さんは博物館に来る人数が一番少ないが。

委員

中学校側のアナウンス不足もある。なお、中学校では生徒手帳が生徒カードになってきている。生徒手帳だったらどこにどういう博物館や美術館があって、何割引きで入館できることが一目でわかる。生徒カードは見せるだけで半額になったり無料になったりということもあるが、子どもたちが施設の内容を一目で確認できなくなっている。中学校側が子どもたちに対し利用の面を発信しなくてはならない。

会長

昔の生徒手帳はもうないか。

委員

残っている所もある。生徒カードになると、その QR コードを読めば情報が出る。施設をしっかりアピールしたいと思う。

事務局

ありがとうございます

会長

ほかに意見はあるか。

委員

小学校まわりの川や田で虫を捕まえたり触ったりして興味を持っている子どもは多い。中には嫌がる子もいるが。それについて教えてもらえる所があるというのは大変ありがたい。夏休みに入ると子どもさんや親御さんの中には非常に熱心に自由研究をする方もいるが、それについてのアドバイスをここでいただけるという事業もあるので。「自然のなんでも相談会」ということで、そういったものは大変ありがたい。引き続き継続していただきたい。昨年度も新聞で、中学生による発見の報道があり、大変すばらしい。

会長

博物館の存在が教育現場で子どもたちにどのくらい浸透しているのかということもある。博物館側の努力というより、学校側で生徒にこのような博物館があるという広報をするということも必要だろう。

委員

チラシが届けば生徒に配るという対応はとっている。

委員

中学校でもそうだが、DX化ということで、紙媒体のチラシも少なくなっていくのかなと思う。子どもたちには本物を見て感動してもらいたいと思うし、本物を見ることはとても重要なことだと思う。QRコードを見て家庭の方が入館するきっかけ作りができれば良い。

会長

状況が変わってきているが、博物館とさまざまな組織が協力して市民の方々に「自然に親しむ」という文化を広めていく必要がある。

委員

博物館は、子どもたちにとっては身近な昆虫などをたくさん調べたりするという、おもしろい場所という感覚だったが、ここに来て博物館の役割は地域の生物たちを保管したりする大切な目的もあるとわかり、大切な場所だと思った。社会にとって大切な場所ということがみんなにわかると、子どもたちもここにくると使命感を感じて携わることが増えると感じた。学校にも出張したり、博物館のものを館外に展示したり、子どもたちが寄って楽しいイベントを開催してくださっているのが、もっと伝わると良いと思う。

会長

ほかに何かご意見などはあるか。

委員

博物館が令和11年に供用開始ということは、そのまえに引っ越し作業がある。どの程度の休館期間を想定しているのか。引っ越しなどの作業に学芸員が関わる時間を取れる工夫が必要では

ないか。例年行っているさまざまな行事をその間やるのか。その間、友の会が博物館の負担を減らすために行事をやるという考えもあるかもしれない。

倉敷市の環境学習センターでは団体登録制度があり、登録団体は施設の使用料の減免があったり、環境学習センターに相談できる。今の友の会以外に新規に自然のことで活動する団体が出てきたとき、博物館とどのように連携すれば良いか分らないと思う。移転後のことに絡むが自然のことで活動する団体の関係者が博物館のような核となる施設に関われるのが良い。

「自然の標本なんでも相談会」は8月に行われていたが、「自然のなんでも相談会」として開催するなら、夏休みの頭の時期に開催した方が良い。小学校・中学校の自由研究は標本づくりがメインではなくなってきた。あるいは、自由研究が必須ではなくなっているの、夏休みの初めごろに自由研究をやろうよという働きかけを含めたイベントのスケジュール感を考えていかなくていけない。

自然観察会は観察対象を見るのに一番良い時期を選ぶのは良いが、「高梁川流域自然たんけん」のように季節ごとの自然に関心を持ってもらう取り組みとなるものも良い。

事務局

自然史博物館は令和11年3月末までの完成を目指し、その後におそらく引っ越し作業などが入る。建て替えとは違うので、閉館している期間は通常の建て替えに比べて短くなる見込みである。一方、そういった準備と、通常の開館業務、博物館業務が同時に重なるため学芸員に非常に過重な負担がかかる。そこは教育委員会全体としてバックアップし、業務の標準化や今できることとしても極力、効率化を目指し、総合的にあたっていきたい。

団体との連携については、今の博物館友の会は自然観察会などを中心に博物館まつりなども共催していただいたり、密接な関係がある。ほかにもさまざまなレベルでの連携がある。例えば、倉敷昆虫同好会・倉敷の自然を守る会・重井薬用植物園などのほか、博物館まつりの時に来ている市内外の大学・学校関係などの団体がある。館としては、いろんな団体とさまざまなレベルで積極的に関係を持ちながら事業を展開していくことを目指している。新館の計画は、まだ未定だが、さまざまな団体との連携は積極的にしていきたいと考えている。

委員

今の連携は、博物館側のほうが連携したい団体に声を掛けることが多いのではないかと。潜在的には倉敷市内には自然のことについてやりたいけれど、どこが力になってくれるのかよくわからないという団体が結構多い。そういった団体に、博物館は連携をしてくれる施設でもあるとアピールをしていただきたい。環境学習センターのように団体登録制度みたいなものを作っても良い。

事務局

倉敷市の生涯学習施設という点を踏まえて、どういったところと連携していくのが可能かどうかを、今後、検討していなくてはならない。

「自然の標本なんでも相談会」については、これまでは標本に特化したイベントとして企画し、標本ができあがって、それを調べてもわからないものがあれば識別方法を指導をする、といったところに発想があり、夏休みの後半という設定だった。自由研究を広く対象とすることを考え、

来年度以降は実施時期を早めたい。

委員

標本づくりみたいに2回やるのも考えられる。自然物に関し、「採る会」・「作る会」・「相談にのる会」、でき上がったものを「見る会」みたいなものがあるといちばん良い。

会長

ご検討下さい。

委員

新しいライフパーク倉敷への移転についての基本計画について、これからブラッシュアップされていくと思うし、壮大な素晴らしい計画と思うが、これをどうやって3000m²もない展示空間に落とし込んでいくのか。実際これを見学してくださる人たちに、倉敷を中心にして、どのように世界を・過去を・地球をどう見せるのか。

学芸の負担については、学芸しかできない仕事があるが、特に展示づくりは学芸員しかできない。業者に任せればできなくはないが、それではいい展示はできない。展示づくりは大変な負担・仕事量になるので、通常の運営をしながら展示をどうするのか。

会長

ある期間、閉館することもあるかもしれない。開館するといろんな他の業務が発生する。将来の組織づくりというか、館づくりに集中することもあるかもしれない。移転ではここを撤収することも結構な仕事量になる。いくつかの収蔵庫に分散して保管しているものを展示しなくてはならないこともあり、キャプションを書くということも結構な仕事になる。それに集中できるようにある期間閉めるということも含めて無理のないようにしていただきたい。仕事が楽しめる余裕が必要だというのは私が経験したことからよくわかる。

副会長

学芸員の仕事は大変だと思う。例えば自分が楽しい授業していると子どもも楽しい。それと同じで、自分が楽しんで展示とか活動やってたら、参加してくださる方も多分楽しい。

協議会の資料については、前年度の報告は素晴らしいが、今年度に対してどう改善しているのかということがよくわからない。ブラッシュアップしていくというか、どこを改善していくというか、ひとつ階段を上るというか、それが必要。

外から見て思うのは、主体的に来館者が楽しめる、つまり、参加できる博物館が良いと思う。ここの自然史博物館はフィールドはないので館が中心になるかもしれない。糸口としては、むしろ探検隊がやっている、子どもに対して説明する・自慢するというのは良い。明石市の天文博物館は子どもプラネタリウムというのをやっている。かなり多くのプラネタリウムはこのようなことをやっていると思うが、子どもから子どもへというのは非常に興味がわいてよいのではないか。倉敷のような地方都市で科学系と自然史系の博物館をもっているというのは聞いたことも見たこともない。素晴らしい遺産だと思う。ぜひ、これから発展していったほしいと思うし、そう

いう興味のある人たちが集ってくるネットワークの中心になる博物館であってほしい。

会長

ほかに意見はあるか。

委員

紹介になるが、最近、岡山からキビノタツナミソウという新種植物が発見され、6月20日に論文が出た。これは今までハナタツナミソウという植物と一緒にしていたものが、研究者が別種と気づいて見つかった。素晴らしいのはホロタイプ（基準標本）として、この自然史博物館の収蔵標本が指定されたことである。植物標本のホロタイプ指定はこの自然史博物館では初めてではないかということで、この自然史博物館のお宝が一つ増えたようである。その基準標本は1985年に前任の狩山氏が採取された標本で、野生でも結構あるようだが、標本があったからこそ、その中から確認ができた。標本の実物が博物館に収蔵されていたからこそ新種が確認でき、ホロタイプになったということで、これは世界に一つしかない。博物館が多くの標本を集め続けていたからこそ新種が見つかったということである。これはかなり大きなニュースで、博物館としても大きくアピールしていただきたい。

会長

まさにそのとおりで、標本が蓄積されていることは外から見えにくいがある。一般の方に、博物館はレクリエーション的に楽しむだけでなく、バックヤードや研究している人々がいて、それが積み重なって成り立っていることも知っていただくと良い。それもまた博物館側のアピールになる。この間は、高梁市の成羽美術館の標本からも発見があった。

委員

高梁市の成羽美術館の開館当時から30年以上展示されていた標本から、岡山理科大学の研究者が研究したら魚竜の化石ということが分かり、全国を駆け巡るニュースになった。研究者は美術館とはいえ化石を丁寧に保管して展示していたからこそ今回の発見につながったといっていた。多くの貴重な標本は守っていかなくてはならない。

会長

ほかには何かあるか。

委員

補足だが、ハナタツナミソウは絶滅危惧植物でも何でもない普通の植物だが、岡山県から発見されたということで岡山県のレッドデータブックでは、最低限、留意種ということにしなければならない。生育数が少ないようであれば、絶滅危惧種として指定することになる。普通種として集めていた中から見つかったということで、博物館としては非常に喜ばしい。

委員

広報はどなたがしているか。インスタグラムとかホームページとかの担当はいるか。

事務局

担当の職員が中心で、会計年度の方や学芸員など、全員でやっている。

委員

最近の母親などは多くはインスタグラムや公式LINEとかでイベントを探している。夏休みの行先などで。その情報もいろんなところから得られるが、自然史博物館はどこでヒットしているのかと思う。自然史博物館は良いホームページがあるし、新種の植物の発見例も伝わればよい。

会長

情報伝達の媒体はかなり変化し、最近は紙媒体はあまり見られていない。みんなインターネットを見ているが、その中で知ってもらうには発信する側の対策が必要だろう。フォロワー数を増やすには情報発信の仕方に関するアドバイザーがいると思う。組織的に支援する方法を考える必要がある。

委員

エデュケーターがいれば学芸員の仕事が減ると勘違いされるが、いることでいろいろ仕事が増えることもある。人員増やせばいいわけではなく、少数精鋭でどううまくやるか。自然史博物館は毎年多くのイベントをやっている。運営をどうするかや人員配置は大事になってくる。

会長

研究の発信面でコメントがある。研究は科学の最先端であり、新しいことを世の中に付け加えていくということ。今はオンラインの時代になってきたので、研究の出版物がデジタル化でオンラインに載せることが重要。博物館の研究報告みたいなものはJ-STAGEに登録し、どこからでもアクセスして見られる形にしてほしい。広く学术界にアピールしていけると思う。

委員

おうちの方はどこに子どもを連れて行けばよいか探している。博物館に行けば冷房の電気代が節約できるし、子どもたちは生徒手帳があれば半額になったりする。よい所がたくさんある。デジタル化ということもあるが、子どもは展示を見て興味を持つことも多い。一つにまとまった市の施設があり、何パーセント割引・小学校以下無料とかそういったものが、他のメディアのお出かけ便りみたいな所とリンクしていたら、その中の選択肢の一つとして行ってみるか、ということになると思う。家族で行ける手軽な場所になれば良い。

会長

この自然史博物館は高校生以下無料だが、今の中学生の生徒はこの存在とか無料で入れるとかは知らないか。

委員

今はあまり知らない。興味がある子は多分何回も通っていると思うが、興味がない子は知らないと思う。中学生になると日曜日は部活動やクラブチームに行くことが多い。家族と出かける夏休みは生徒の知的好奇心を刺激するチャンスになると思う。

会長

小学校はどうか。

委員

ライフパーク移転後は科学センターと近くなるので、両方1か所で見ることができ、学校の遠足などの行事で便利になると思う。また、催し物も違うので、1か所で両方に参加できるのは良い。PR方法も新しくなると思う。

会長

引率のバス代も高いが、1か所、そこに行けば滞在して、全部楽しめるかもしれない。

委員

自然史博物館のみらい公園の観察会では、最近、参加者の子どもたちの低年齢化が進んでいる。前は、自然に興味のある小学生以上が多かったが、最近は未就学児を連れてくるお父さん・お母さんが増え、子どもを自然に触れ合わせたくて連れてくる。小学校に上がると来なくなる。対象年齢を未就学児に想定しないといけないかもしれない。未就学児が自然観察したいというニーズはありますか。

委員

あると思う。私の息子が昆虫とかダンゴムシとか集めてくる。

委員

草花を持って来る子もいるか。

委員

アジサイをつんで持って帰りたいとかいう子もいる。

委員

小さいときに自然に興味を持たせれば小学校に行っているいろんな生き物に抵抗を持たない子どもたちが増える。小学生よりも未就学児を重要視していかないといけない。

会長

恐竜なんかは未就学児が中心ですね。小学1・2年生だと、もう来ない。

委員

興味が続く子もいるが、見に来るのは、未就学児が多い。

会長

2歳半の孫を連れて行っただが、単にガオーと鳴いているのを見ていたわけでもない。この間、アンパンマンに関する話で「アンパンマンマーチは生きがいについて大人に問いかけている。これを小さいときに聞いていれば、大人になって歌詞の意味について考えてくれる人がいるので、難しい哲学的な歌詞を入れている」ということを聞いた。自然史博物館でも小学校高学年以上の子どもたちに伝わる深い話を、低年齢の人に伝えるのは大事かと思う。

これで本日は、終わりたいと思います。事務局に戻します。

事務局

ありがとうございました。それでは閉会にあたり、倉敷市教育委員会生涯学習部長からごあいさつ申し上げます。

5 閉会あいさつ

事務局（生涯学習部長）

本日は大変お忙しい中、ご参加いただき、ご意見いただきまして、誠にありがとうございました。令和11年に新しい自然史博物館は、施設がライフパークに移転することになっております。今後とも、より一層、市民の皆さまに喜んでいただけますよう、一層、励んでいきたいと考えておりますので、今後とも、ご支援のほどよろしくお願いいたします。本日は、どうもありがとうございました。

6 閉会

事務局

これにて令和7年度第1回倉敷市立自然史博物館協議会を終了する。

（閉会后、特別企画展「倉敷市立自然史博物館秘蔵お宝展 第3弾」展示解説を実施）

以上を、令和7年7月16日開催の令和7年度第1回倉敷市立自然史博物館協議会議事録（要旨）とすることに同意します。

令和7年 10月17日

倉敷市立自然史博物館協議会

会長 石垣 忍

石垣 忍

